

オンラインによるグループの取り組みに関する一考察

——コロナ禍に実施したオンライン少人数授業を手掛かりとして——

和田 竜太¹

[要約]

学生総合支援機構学生相談部門（学生相談センター）では、主に本学学生からの個別相談に加えて、様々なグループによる取り組みを実施している。グループによる取り組みでは、対面、オンライン、ハイブリッドなど様々な実施形態があり、それぞれの取り組みにおける目的や意義を踏まえつつ実施形態を選択していくことが重要であろう。筆者はコロナ禍の2021年度に学部1回生を対象とした少人数セミナー形式の授業を実施した際、新型コロナウイルス感染拡大防止のため大学の方針として、授業期間の途中で授業の実施形式を対面からオンラインに、さらにオンラインから対面に切り替える必要に迫られる状況に遭遇し、どのようにして授業を成立させることができるか、またオンライン形式で受講生にいかにグループワークを通じた体験をしてもらえるかなどについて限られた時間の中で考え模索しながら授業を行うという経験を持った。本論では、その際に筆者が考えたことや模索したことなどを振り返り、それらを手掛かりにしつつ、オンラインによるグループの取り組みについて考察を行った。

[キーワード]

オンライン、グループ、学生相談

1 はじめに

学生総合支援機構学生相談部門の学生相談センター¹⁾（以下、当センターとする）では、本学学生（および学生対応に関する相談については本学教職員も）を対象とした個別相談に加えて、様々なグループによる取り組みを積極的に実施している。たとえば、通年・定期開催のグループプログラム「くすくす」や、コロナ禍が始まった2020年度に学部に入学生を対象とした「2020年度学部入学生で語ろう会」、居場所・作業型グループの「Co-Working, Go One's Way の会」（愛称「こわ・ごわの会」、都合により2025年4月より休止中）、休学中あるいは休学経験のある学生を対象とした復学者向けイベント「そろりの会」、他大学出身の大学院生を対象としたグループイベント、また桂相談室や宇治相談室では毎月あるいは定期開催の形で様々なグループイベントを実施している（上記グループによる取り組みについては、古川・葺石（2020）、河本（2022, 2023, 2024）、藤居・江城・古川（2023）、三枚ら（2024）で詳しく述べられている）。また、本学の全学生を対象としてメンタルヘルスに関する予防的な支援の取り組みとして「心理教育セミナー」を実施しており、その際 Zoom によるオンライン受講に加えて、本学の3つのキャンパス全てに参加会場を設けており、（交流を目的としたものではない点で純粋なグループとは性質が異なるが）オンサイトで同時に同じセミナーを受講することを通して「場を共にする」側面がある取り組みと言えよう（なお、心理教育セミナーについては古川・杉原（2023）で詳しく述べられている）。さらに、2023年度後期からは新たにピアサポート活動を実施しており、ピアサポーターリプライボックスの設置やピアサポーターによる交流イベン

¹ 京都大学・学生総合支援機構・学生相談部門・講師

ト・昼休み相談会の実施など各種活動が行われており、ピアサポーター同士の交流や実施している各種活動を通して様々な形でグループによる取り組みが行われている（ピアサポート活動については古川（2022, 2024）がその実施の意義や取り組みについて詳しく述べている）。

上記グループによる取り組みの多くは対面形式で実施しており、オンサイトでお互いに顔の見える形で行い、場を共にしながらの交流を通して、また（こちらは「時に」ということにはなるが）各グループの実施前後（開始前および終了後）のある種の「遊び（余白・余韻）」の場面での個別的な交流を通して、対面でのコミュニケーションの機会をもつこと、つながりや居場所作りの一助となること等、各グループによる取り組みにおける目的や意義を踏まえつつ実施しているところである。

一方、グループによる取り組みの実施形式として、対面以外に、オンラインによる実施が挙げられる。当センターにおけるグループによる取り組みでも、実施頻度は対面形式より少ないものの、オンライン形式でも実施している場合があり、取り組みによってはオンサイトとオンラインのハイブリッド形式で実施している場合もある。オンラインによるグループの取り組みは、各所で以前から様々な形で実施されてきていたであろうが、特にコロナ禍を経て、より広く一般的に行われるようになったように思われる。オンライン形式の場合、参加者はそれぞれ別の場所からアクセスすることになり、リアルな形で「場を共にする」ということはできず、また回線状況に左右されやすいなどハード面での難しさがある一方で、わざわざ会場まで足を運ばなくても自室や実家などの遠方からでも参加できるアクセスのしやすさや、対面形式だと緊張やプレッシャーなどを強く感じるような場合でもオンライン形式だとそれらが幾分か和らいで感じられて参加しやすい（ことがある）などといったオンライン形式の特徴が様々ある。

対面形式・オンライン形式それぞれともに一長一短がありつつも、それぞれの取り組みに適した形式を考慮し選択しながら、当センターでも様々なグループによる取り組みが実施されているところである。

ところで、筆者は隔年で、学部1回生を対象とした、本学の少人数セミナー形式の授業「ILASセミナー：人間関係を学ぶ」（以下、本授業とする）を開講（担当）しており、まさにコロナ禍の真っ只中であった2021年度前期にも本授業を開講した。その際、学期が始まって2回目の授業までは対面形式で実施できたものの、新型コロナウイルスの感染拡大に伴って緊急事態宣言が発出されたことにより、2021年4月22日から授業を原則オンラインで実施するとの本学の方針に沿って、3回目からオンライン（Zoom）形式で授業を実施せざるを得なくなった。当初はオンラインによる授業実施は同年5月12日までとされたが、緊急事態宣言の継続に伴って数度延長となり、最終的には同年6月20日までオンラインでの授業実施となり、6月21日以降ようやく対面での授業実施が可能な状況となった。筆者が担当していた本授業も同年6月28日以降、対面形式での授業実施となり、それ以降はなんとか学期末まで対面形式を継続して本授業を終えたのであった（コロナ禍における本学や当センターの対応や状況等については、拙稿（2020, 2021, 2022, 2023）で述べている）。

上記対面形式からオンライン形式への変更は、本授業に適した形式を考慮し選択した上での対応ではなく、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う本学の方針に沿った、やむにやまれぬ対応であった。その際、筆者なりに、どのようにして授業を成立させることができるか、またオンラインの形で受講生にいきなり「（本授業の目的である）グループワークを通して自身の感情（気持ち）や感覚（感じ）を感じつつ様々な体験をしてもらえるか」について、限られた時間の中で考え模索しながら授業を実施した。

今回、筆者がコロナ禍で実施した、オンラインによるグループワークを主とした授業を振り返ることを手掛かりとして、オンラインによるグループの取り組みについて考える機会としたい。

2 筆者開講の授業「ILAS セミナー：人間関係を学ぶ」について

筆者開講の授業「ILAS セミナー：人間関係を学ぶ」については、すでに拙稿（2017）で述べており、本稿では詳細な説明は割愛し、簡単に説明するに留める。

ILAS セミナーとは、本学において2016年度より開講されている、主に学部1回生を対象とした少人数セミナー形式の授業であり、一つの授業に5～25人程度の受講生で、各学部・研究科、研究所、センター等の教員が様々なテーマで授業を開講している。

筆者はこのILASセミナーにおいて、「人間関係を学ぶ」をテーマとして、様々なグループワークを通して、受講生に授業内で「自ら感じたこと」を手掛かりに“体験的に人間関係を学ぶ”ことを主眼として、隔年で授業を開講している。本授業の目的や到達目標、授業計画について、以下に2021年度前期に開講した際の本授業のシラバスの記載を引用する。

〈授業の概要・目的〉

本授業のテーマである「人間関係を学ぶ」という言葉を見て、どのようなことが思い浮かぶでしょうか。大学生活では、これまでより幅広い人間関係を築く機会や場をもつようになる人も多いことでしょう。また同時に、自分がどのような人間関係をどの程度もつかについての自由度は今まで以上に増すことでしょう。人間関係に対するスタンスは人それぞれ違っても、人間関係においてどのようなことがポイントとなるかについては共通したものがあるかもしれません。しかしながら、「人間関係を学ぶ」と言っても、この授業は必ずしも「人間関係を上手に築く方法」や「人間関係を円滑に保つ（進める）やり方」をただ聞いて学ぶ、というものではありません。この授業の中で様々な状況・環境に身を置き、そこでの他の人（たち）とかかわりを通して、人間関係においてどのような姿勢・ありようがポイントとなるかについて、みなさん自身が体験的に学ぶ機会となればと思います。

〈到達目標〉

人間関係は、自分と相手（他者）との相互作用を通して形作られていく創造的な営みと言えるでしょう。その背後では、自分自身について、あるいは相手（他者）に対して、様々な感情（気持ち）や感覚（感じ）が動いていると考えられます。この授業では、そうした自分自身の感情（気持ち）や感覚（感じ）にアプローチするとともに、相手（他者）の感情（気持ち）や感覚（感じ）を想像すること、さらには「相手（他者）の身になる」ことの意味やその重要性について学ぶ機会にしたいと思います。この授業で体験的に人間関係を学ぶことを通して、自分自身や他者への理解を深め、人間関係における姿勢・ありようのポイントを自ら見出すこと、また様々なグループワークの中で自分自身の感情（気持ち）や感覚（感じ）を表現する力を身につけ、他の人（たち）とコミュニケーションを取りディスカッションを行う姿勢・意欲を養うことを目標とします。

〈授業計画と内容〉

小グループによる様々なグループワークやディスカッションを中心に行っていきます。また、粘土、絵の具といった素材も用いながら、感情（気持ち）だけでなく、感覚（感じ）、特に身体感覚（感じ）にふれるワークも交え、普段はなかなか意識することの難しい「五感」をいかに人間関係の中で活かしていくか、についても学ぶ機会としたいと思います。

授業予定は以下の通りです。(スケジュールや内容は変更する場合があります。)

.....

上記を踏まえた上で、次章でコロナ禍の2021年度前期の本授業の全体的な状況について振り返ってみたい。

3 (コロナ禍の) 2021年度前期の「ILAS セミナー：人間関係を学ぶ」について

本授業では、例年、学部1回生を対象として定員を15名に設定しており、2021年度も同様に設定したが、受講希望者多数のため抽選となり、15名が履修許可者となったが、そのうち1名は1回も出席なく本登録も行われなかったため、受講生14名(男性7名、女性7名)で授業を実施した。

2021年度の本授業開講当初は、対面形式での授業が可能な状況だったこともあり、基本的には授業期間を通じて対面形式で授業を実施する前提でスケジュールを考えていた。当初考えていた授業スケジュールは以下の通りである(以下はグループワークを行う予定の回のみ記載している)。

- ・ #1: オリエンテーション, 自己紹介 【対面】
- ・ #2: 他己紹介 【対面】
- ・ #3: アイスブレイク (マシュマロ・チャレンジ) 【対面】
- ・ #4: コンセンサス (水夫と若い女性) 【対面】
- ・ #5: 一方通行のコミュニケーション・双方向のコミュニケーション 【対面】
- ・ #6: バスは待ってくれない 【対面】
- ・ #7: ブラインドウォーク 【対面】
- ・ #8: 感じたことや感覚を言葉で伝える・感じや感覚を聞いてイメージする (好きな場所探し) 【対面】
- ・ #9: 粘土 【対面】
- ・ #10: フィンガーペインティング 【対面】
- ・ #11: カッティング 【対面】

しかしながら、先述したように、2回目までは対面形式で実施できたものの、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言の発出に伴い、本学の方針として3回目以降は原則オンラインによる実施となり、最終的にオンラインによる授業実施は9回目の授業まで継続され、10回目の授業からようやく再び対面形式で実施できることになったのであった。2021年度に実際に行った本授業の内容は以下の通りである(以下はグループワークを行った回のみ記載している)。

- ・ #1: オリエンテーション, 自己紹介 【対面】
- ・ #2: 他己紹介 【対面】
- ・ #3: アイスブレイク (謎解きゲーム) 【Zoom】
- ・ #4: バスは待ってくれない 【Zoom】
- ・ #5: ピアノ発表会のプログラム 【Zoom】
- ・ #6: コンセンサス 1 (NASA ゲーム) 【Zoom】
- ・ #7: コンセンサス 2 (水夫と若い女性) 【Zoom】
- ・ #8: 一方通行のコミュニケーション・双方向のコミュニケーション 【Zoom】

- ・ #9：ことばによるコミュニケーション・非言語によるコミュニケーション 【Zoom】
- ・ #10：感じたことや感覚を言葉で伝える・感じや感覚を聞いてイメージする（好きな場所探し）【対面】
- ・ #11：粘土 【対面】
- ・ #12：ブラインドワーク 【対面】

3回目以降、原則オンラインによる授業実施との方針になったことを受けて、急遽元々予定していた授業内容をオンラインで実施可能な内容に変更すべく、また全体の流れや組み立ても考慮しつつ、限られた時間の中で考え、なんとか上記のような内容に至ったのであった。次章以降で、筆者がどのように考え、試行錯誤しながら実施し、実施した結果どのようなことが見いだされたかなどを振り返ってみたい。

4 対面からオンラインへの授業形式の変更について

コロナ禍が始まった2020年度前期は、本学の授業は全面オンラインとなり、同年度後期には対面授業の再開を期待する学生からの声が多く聞かれたものの、結果的には対面授業再開とはならず、ほとんどの授業がオンラインのままで1年間を終えることになったのであった。2021年度前期の授業については、本学から早々に「感染拡大予防策を講じたうえで、原則、対面授業の実施を進める方針とします」との方針が示され（京都大学、2021）、ほとんどの授業が対面で開始された。しかしながら、上記方針の中では「新型コロナウイルス感染症拡大等の状況によっては、対面授業をオンライン授業等へ変更する可能性もあります。」ともあり、筆者も「もしかしたら授業実施途中のどこかのタイミングでオンラインに変更せざるを得ない状況があるかもしれない」と頭の片隅でうっすら思いつつも、そうなるとも限らない中で、オンライン授業に変更となった場合の準備を具体的には行っていなかった。

本授業も当初は対面で開始し、1回目（オリエンテーション・自己紹介）と2回目（他己紹介）は14名の受講生が全員教室に集まり授業を行った。しかし、2回目の授業後の4月22日付けで本学では再び原則オンライン授業との方針になり、それに伴って本授業も3回目から9回目までオンラインで実施することになったのであった。

コロナ禍が始まってから、筆者はカウンセリングルームでの個別相談の多くをZoomを用いてオンラインで実施しており、またオンライン会議やオンラインによる研修会への参加も約1年数か月の間で度々経験しており、オンラインでの授業実施自体は初めてのことであったが、Zoomを用いて授業を実施するイメージはある程度前もって持つことができていた。

ただ、元々予定していた授業内容の多くは、対面形式を前提としたものであり、たとえば、3回目に予定していた「マシュマロ・チャレンジ」は、受講生が教室に集まって実施するグループワークであり、オンラインでの実施は不可能であった。また、授業後半で予定していた、「ブラインドワーク」、「感じたことや感覚を言葉で伝える・感じや感覚を聞いてイメージする（好きな場所探し）」、「粘土」、「フィンガーペインティング」、「カッティング」も対面を前提としたグループワークであり、何らかの形でオンラインで実施できないかと思案したものの、やはりオンラインでは実施は難しいと判断せざるを得なかった（なお、これらの授業内容の詳細については、拙稿（2014、2017）で述べている）。

そこで、オンラインで実施できる、かつ本授業の目的や到達目標、授業を通して受講生に感じ体験してもらいたいと筆者が考えていることがなんとか実現可能な内容を、新たに考える必要に迫られたのであった。

次章では、個々の授業内容に沿いつつ、筆者がどのように考え、取り組んだかについて振り返ってみたい。

5 オンライン形式で実施した個々の授業内容について

5.1 謎解きゲーム

本授業では、半期にわたって同じメンバーで様々なグループワークを行うことを通して、自身の気持ちや感覚にアプローチするとともに、他者の気持ちや感覚を想像し、「他者の身になる」ことを様々な形で体験することを主眼としている。そのため、授業の3回目までは、初対面の状況から、自己紹介や他己紹介を通してお互いを知り、アイスブレイクを通して緊張感を解しつつ、グループワークを行う土台作りを意識しながら授業内容を設定している。通常であれば、1回目に自己紹介、2回目に他己紹介を行い、3回目に受講生14名を3グループに分けてマシュマロ・チャレンジを実施する予定であった。しかしながら、先述したように、2021年度の授業では、1、2回目の授業は対面で実施できたものの、3回目から急遽オンライン授業となり、またマシュマロ・チャレンジは対面を前提としたグループワークのため、オンラインでは実施できず、別の内容に変更する必要があることが出て来た。上記に述べたように、3回目の授業は、緊張感を解しつつグループワークを行う土台作りに主眼を置いており、そうした要素をオンラインで実現する内容として、筆者は「グループで謎解きを行う」ことを思いついた。近年、各地で謎解きイベントが実施されていて、多くの人に参加しているという話を聞いたことはあったが、筆者自身は参加したことはなく、謎解き自体もテレビのクイズ番組で謎解き風の問題を見かけたことがある程度で、決して謎解きに詳しい訳ではなかった。ただ、マシュマロ・チャレンジに代わる内容を考えている際に、「同じ謎解きを一人で解くのではなく、グループのメンバーと一緒に考えながら解いてもらったら、答えを考える中でお互いに思いついたことを言い合ったりなどやりとりが生まれやすく、アイスブレイクとしていいのではないか」と思い至ったのであった。

そこで、いくつかの謎解きの問題本を入手し（たとえば、SCRAP (2017)、篠原・SCRAP (2019)、SCRAP (2020)）、それらに掲載されている問題から、易しめの問題から難しいと思われる問題まで15問ピックアップして問題を準備した。問題は1問1問、pdfデータで作成した上で、データをDropboxに保存した。

実際の授業では、Zoomで参加した14名の受講生を3グループ（5人×2、4人×1）に分け、ブレイクアウトルームを使ってZoom内でグループに分かれてもらい、ブレイクアウトルームに分かれた後に、その都度筆者を呼びだしてもらい、筆者がブレイクアウトルーム内のチャットに、当該問題のpdfデータが保存されているDropboxのURLを貼り付ける形で出題した。問題をグループで考えてもらい、答えが分かったら、再度筆者を呼び出してもらい、筆者から正誤を伝えるときに、正解の場合には新たな問題をDropboxのURLを貼り付けて出題する、ということを繰り返した。

結果としては、3グループのうち1つのグループが、全15問を40分でクリアし、他の2グループもそれぞれ45分、50分でクリアし、筆者としては90分授業内に収まればいいかなと思っていた想定からすると、いずれもグループも筆者の想定よりかなり早くクリアしたのであった。

受講生からは、グループで一緒に謎解きをするのがとても楽しかった、オンラインでどうなるかと思ったけど特に支障なくスムーズにやりとりや交流ができて良かった、などの感想があり、筆者としてはかなり付け焼刃、かつ出たとこ勝負での実施であったが、「(受講生の)緊張感を解しつつグループワークを行う土台作り」という目的としては果たせたのかなと思われた。

5.2 バスは待ってくれない・ピアノ発表会のプログラム

4回目、5回目では、メンバー全員が参画しながらグループとして1つの課題達成を目指して取り組んでもらえるよう、各人に断片的な情報を与え、グループ内で口頭だけで情報を伝え合いながら、「バスは待ってくれない (大澤, 2014)」では登場人物が目指す歯医者までの地図を描く、「ピアノ発表会のプログラム (青

森県総合社会教育センター，2014)」ではピアノ発表会の発表者・演奏曲名・作曲者名が書かれたプログラムを演奏の順番通りに作成する，という課題を行った。これらにおいても Zoom で参加した受講生を 2 グループ（7 人×2）に分けて，ブレイクアウトルームを使って実施した。

結果としては，「バスは待ってくれない」については，2 つの班とも，90 分の授業時間を目いっぱい使ったものの，正解にはほど遠いところで時間切れとなった。「バスは待ってくれない」は，各人の情報を共有するだけでは矛盾が発生し，その矛盾をいかにブレイクスルーできるかが正解の地図にたどり着くためのカギとなるが，対面形式で実施した場合には，その矛盾をなんとか打破しようと，グループで 1 枚の地図を何度も書き換えながら正解にたどり着こうとする様子が多くの場合見受けられるが，オンラインで実施した場合には，筆者から各グループに Whiteboard FOX という描画ツールの URL を伝えていたものの，1 枚の地図をグループのメンバー全員で適宜書き換えながらそれを共有しつつ正解を目指していく，ということが難しかったことが推察された。このあたりは，対面形式とオンライン形式でのメリット・デメリットがはっきりと際立って現れた点のように思われた。

また，「ピアノ発表会のプログラム」については，2 グループのうち 1 つのグループが 30 分で正解にたどり着き，もう一つのグループも 35 分で正解のプログラムを完成させた。「ピアノ発表会のプログラム」で各人に提示する断片的な情報は「バスは待ってくれない」とは異なり，共有しても矛盾を来さず，各人が持っている情報を適切に共有しさえすれば正解にたどり着く，比較的容易な課題である。手順やグループ内の取り組み自体は「バスは待ってくれない」と求められることはほぼ同じなのであるが，内容の難易の程度によってオンライン形式での取り組みの難易度にも大きな違いが現れたことは印象的であった。オンライン形式の場合には，参加者に求める課題の難易度について，前もって十分に検討・配慮を行うことがより必要であることを感じさせるものであった。

5.3 コンセンサス（NASA ゲーム・水夫と若い女性）

続いて，6 回目，7 回目では，必ずしも明確な正解がない課題について，グループのメンバー間で十分に各人の考えを伝え合い，妥協や遠慮・譲り合い・取り引き等によらず，各人の考えに十分に納得したら初めて自分の考えを変える，というルールに基づいてグループ全員の合意を目指す，という課題を実施した。「NASA ゲーム」では，月面で遭難した内容の物語を提示し，残された 15 のアイテムの中から生き残るために優先度の高い順に，まずは各人で順番を付け，その後グループのメンバー全員で順番の合意を目指す，「水夫と若い女性」では，船が遭難して生き残った 5 名が登場する物語を提示して，どの人物が好ましいかについて，まずは各人で順番を付け，その後グループのメンバー全員で順番の合意を目指す，という課題を実施した。

ここでも受講生 14 名を 3 グループに分け，Zoom のブレイクアウトルームに分かれて各グループ内で話し合い，合意を目指してやりとりを行ってもらった。

結果としては，「NASA ゲーム」については，グループでの話し合いにおよそ 35 分時間を取ったものの，各グループとも半分くらいまでしか合意が進んでおらず，筆者が各グループに入って状況を確認し，途中になっても構わないのでと 2，3 分で終了の旨伝えて，終了とした。それでも，残りの数分で各グループとも，ある程度の合意が得られたようで，各グループとしての回答が示された。NASA ゲームでは一応模範解答とされているものがあるのだが，各グループの回答と模範解答の誤差は，最小が 24 点，最大が 38 点であり，誤差の平均が 46～55 点とされていることからすると，各グループとも十分に考えを伝え合い，安易な妥協をせず合意を目指す中で，各グループとも相応しい回答にたどり着いたものと思われた。

「水夫と若い女性」については，グループでの話し合いにおよそ 45 分時間を取ったが，時間内に 2 グル

ブは話し合いに基づいた合意が得られ、1グループはあと少しのところで合意を得るには至らなかった。「水夫と若い女性」については、特に正解がある訳ではなく、各人の考えや価値観によって好ましい人物が大きく異なって来る可能性がある課題であり、その分、十分にグループ内で各人の考えを伝え合うことが、グループ内で合意を得るためにより重要になって来る。各人の考えがより多様である可能性が高いことから「NASA ゲーム」よりもグループ内での合意を得るのは難しいと考えられるが、2グループは時間内に合意が得られ、1グループは時間内に合意が得られなかったものの合意直前までは話し合いが進んでおり、各グループの話し合いを時折筆者がブレイクアウトルームに入って様子を見た際も、オンライン形式で十分に自分の考えを伝え合い、合意を目指して十分に話し合いがなされている様子が感じられたのであった。もちろん合意を目指す課題の内容の難易度によるところも大きいと思われるが、お互いの考えを伝え合い聞き合い、合意を目指してとことんまで話し合いを行う、という課題の際には、オンライン形式でも充分に取り組むを行うことができる可能性を感じた。

5.4 一方通行・双方向のコミュニケーション、ことば・非言語によるコミュニケーション

8回目、9回目では、コミュニケーションにおける双方向性の重要性や、ことばの持つ各人固有の意味付け、コミュニケーションにおける非言語的側面に目を向けてもらう課題を実施した。「一方通行・双方向のコミュニケーション」では、まずグループのメンバーの半分にシンプルな絵を提示して、絵を見た人はどんな絵かを言葉のみで説明して、聞いている人は質問なしで絵を描いていき（一方通行の課題）、次に役割を交代して今度は絵を見たメンバーは、絵を描くメンバーからの質問を受けながら絵の説明を行い、その説明を受けて絵を描くメンバーが絵を描いていく（双方向の課題）課題を行った。「ことばによるコミュニケーション」では、楽しい・悲しい・懐かしい・憎らしいなどの簡単な形容詞を各人に提示して、その語から思い浮かぶことばをできるだけたくさん書いてもらい、後でそれをグループ内で読み上げて共有してもらうという課題である。「非言語によるコミュニケーション」では、筆者が提示した語を、言葉を用いずにジェスチャーだけで次の人に伝えてもらい、それを順に繰り返して、最後の人に最初に筆者が提示した語が何かを当ててもらい、いわゆるジェスチャーゲームを実施した。

結果として、「一方通行・双方向のコミュニケーション」では、対面形式で実施した際と同様に、一方通行の場合には、見た絵を伝え手が描き手に的確に説明し、描き手がその説明を充分に受け取って正解の絵を再現することは非常に困難であるとの感想が多く聞かれた。一方で、双方向の場合には、描き手が伝え手に適宜質問をすることができることから、迷ったり分からなかったりするところは確認でき、より正解に近い絵を描くことができたとの感想が多かった。この課題は、対面形式で実施した場合とオンライン形式で実施した場合で、受講生の取り組みの様子に見た目の印象としてはそう大きな違いがなく見受けられ、オンライン形式での実施に比較的向いている課題であることが感じられた。

「ことばによるコミュニケーション」については、各人がまずは一人で記載した内容をグループ内で伝え合い、その共通性や違いなど感じられたことを伝え合って共有するという課題であり、オンライン形式でも対面形式と遜色なく受講生が取り組んでいる様子が感じられた。

「非言語によるコミュニケーション」についても、PC画面に収まる範囲内でのジェスチャーに制限されるところはありつつも、対面形式での実施とそこまで大きな取り組みの違いは生じない形で実施でき、受講生の取り組みの様子からもオンライン形式での実施が充分可能な課題であることが感じられた。

5.5 再度対面形式に戻って

先述したように、2021年度前期は6月21日以降対面形式での授業実施が可能となり、本授業も10回目から

対面授業を再開し、その後3回グループワークを対面形式で実施することができた。2ヶ月ぶりに全員教室に集まって10回目の授業を実施した際には、受講生のほっとした様子や、久々の対面授業に目を輝かせている様子がひしひしと感じられたが、それとともに、必ずしも能動的・積極的な形で実施した訳ではなく、やむにやまれずそのような形で実施せざるを得なかったオンライン授業ではあったが、グループとしての継続性・持続性はオンライン形式の授業を通して保つことができたように感じ、オンラインによるグループの取り組みの可能性を感じられる機会でもあったと思う。

6 オンラインによるグループの取り組みについて

上記で見てきたように、オンラインによるグループの取り組みには、内容や課題の難易度、導入のタイミングなど、様々な要素によって一長一短があることが窺われる。特に、「バスは待ってられない」で見られたように、対面形式でもなかなか難しい課題をオンライン形式で実施することは、参加者に相当の負担を強いる可能性があることが示唆され、オンライン形式による実施の手軽さと引き換えに、その実施に際しては事前に十分にそのメリット・デメリットや、考え得る参加者の負担など、多方面からの検討を行った上で実施することが肝要であることが窺われた。

これまで述べてきた2021年度の本授業では、時間が限られた中で、そうした点についての検討を行うことが十分に出来ず、見切り発車的にオンライン授業を実施せざるを得なかったところがあり、受講生には負担を掛けた面が多分にあったことと推察し、今更ながらであるが当時の受講生にお詫びを述べるとともに、様々な協力をしてもらったことに心から感謝したい。

今回こうして振り返ってみると、2021年度の本授業で、1, 2回目を対面で実施したことは、受講生にとって3回目から急遽オンラインでの授業になった際、回数は限られていたものの、対面での交流のイメージを持ちながらオンライン授業に参加するととても大きな一助になったのではないかと思われる。また、2021年度の受講生は、筆者が担当している本授業の他のどの年度よりも欠席者が少なく、オンライン形式とは言え、当時の受講生が「交流」の機会に渴望していたことを表しているように思われた。

ところで、単発で実施するグループでは、本授業のように同じメンバーで継続して実施するグループとは様々な異なる点が多々あり、単純に本論で述べて来た内容をそのまま参照・参考にすることは困難であると思われる。単発の場合には、1回限りの関わりとして、あえてオンラインで実施することで、参加の敷居を下げる意味合いをより強く持たせることもあり得るように思われ、当然のことだが単発の場合もオンラインの特徴を十分に活かし、メリット・デメリットを含めて十分に検討した上での実施が望まれる。

7 おわりに

本稿では、コロナ禍で実施したオンライン少人数授業を振り返ることを通して、オンラインによるグループの取り組みについて考えてみた。今後もオンラインによるグループの取り組みには様々な可能性があるように思われ、その特徴を活かしながら、いかなる工夫や実施の方策の余地があり得るか、様々な取り組みを通して経験や知見を積んでいきたい。

[注]

- 1) 本学の3つのキャンパス（吉田・桂・宇治）に設置されている、5つの相談室（北部・吉田・吉田南・桂・宇治）をまとめた呼称として「学生相談センター」を用いている。

[文献]

- 青森県総合社会教育センター. 人間関係づくりのプログラム事例集——学校、家庭、地域ですぐ活用できる体験プログラム（第2版）. 2014.
- 藤居尚子・江城望・古川裕之. コロナ禍を体験した学生を対象としたグループイベントの試み——「2020年度学部入学生で語ろう会」「Co-Working, Go One's Way の会」——. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2023, 2, 81-87.
- 古川裕之・葺石有美. カウンセリングルームにおける新しいグループ活動の取り組み——京都大学におけるこれまでの取り組みと他大学の実施状況に基づいて——. 京都大学学生総合支援センター紀要. 2020, 49, 37-51.
- 古川裕之. 京都大学における学生相談のさらなる充実に向けた試論. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2022, 1, 71-82.
- 古川裕之. 京都大学におけるピアサポート活動の導入とその意義. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2024, 3, 19-29.
- 古川裕之・杉原保史. 学生向けストレス・コーピングセミナーの実施——全学生対象の心理教育セミナー——. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2023, 2, 75-80.
- 河本緑. 学生相談室立ち上げ時期にグループ活動を実施することの意義に関する一考察——宇治キャンパスにおける取り組み——. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2022, 1, 57-69.
- 河本緑. 地域の文化的・歴史的資源を学生相談のグループ活動に活用することの意義——分離キャンパスにおける取り組み——. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2023, 2, 27-37.
- 河本緑. 研究中心型のキャンパスにおいて学生相談のグループ活動とその広報が果たす役割に関する一考察. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2024, 3, 31-42.
- 京都大学. 令和3年度の授業方針について. 2021, <https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/210212-3-bdb1b33962be179fef7ef1cf25e15e2d.pdf> (取得日: 2025年8月31日).
- 三枚奈穂・江城望・河本緑・田原優佳・神代末人・高瀬典子・藤居尚子・和田竜太・古川裕之. 他大学出身の大学院生を対象としてグループイベントの試み——各キャンパスでの実践を通じて——. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2024, 3, 75-82.
- 大澤邦雄. Creative O.D. Advanced Exercise 01「バスは待ってくれない・2」. プレスタイム, 2014.
- SCRAP. ヒラメキナゾトキBOOK. SCRAP 出版, 2017.
- SCRAP. 謎検対策問題集2020. SCRAP 出版, 2020.
- 篠原菊紀（監修）. SCRAP. 脳が喜ぶ新刺激がたくさん！謎解きドリル70問. SCRAP 出版, 2019.
- 和田竜太. 対人場面における「他者の身になる」体験をめぐる一考察——学部生対象の実習を素材に——. 京都大学学生総合支援センター紀要. 2014, 43, 29-37.
- 和田竜太. グループワークを通して人間関係を学ぶということ. 京都大学学生総合支援センター紀要. 2017, 46, 19-37.
- 和田竜太. 一学生相談カウンセラーから見た新型コロナウイルス感染症をめぐる動向について——国内外の動きと本学・カウンセリングルームの対応を振り返って——. 京都大学学生総合支援センター紀要. 2020, 49, 73-83.
- 和田竜太. 一学生相談カウンセラーから見た新型コロナウイルス感染症をめぐる動向について——国内外の動きと本学・カウンセリングルームの対応を振り返って——（第2報）. 京都大学学生総合支援センター紀要. 2021, 50, 35-46.
- 和田竜太. 一学生相談カウンセラーから見た新型コロナウイルス感染症をめぐる動向について——国内外の動き

と本学・カウンセリングルーム（学生相談センター）の対応を振り返って——（第3報）. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2022, 1, 31-42.

和田竜太. 一学生相談カウンセラーから見た新型コロナウイルス感染症をめぐる動向について——国内外の動きと本学・学生相談センターの対応を振り返って——（第4報）. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2023, 2, 39-50.